

ごあいさつ



中部建築賞協議会会長

藤井 良直

中部建築賞は、昭和44年に、中部圏域の地域社会の発展を目的として、建築関係の団体のみならず、行政や商工会議所等経済界からもご支援をいただき、中部建築賞協議会が組織され、創設されました。

以来50年、これまで実に4,515の作品が応募され、うち1,020作品が受賞されており、この地域のまちづくり、そして建築技術、文化の発展に貢献してきました。

このような形で実施されている賞は全国的にもあまり例がなく、この地域独自の賞として、大変貴重でもあり、また権威ある賞として評価をいただいております。

このたび中部建築賞が創設50年という大きな節目を迎えるにあたり、記念事業として、シンポジウムの開催及び記念誌の発行を行うとともに、ホームページの充実を図ることといたしました。

この記念誌は、昨年12月に開催されたシンポジウムの内容と、第1回から第50回までのすべての受賞された作品とその応募や審査の状況等を記録集としてまとめたものです。

建築主、設計者、施工者の方々を始め、審査員の皆様、賞の運営にあたってこられました協議会の皆様など、様々な形でこの賞に関わってこられました方々のご尽力に対しまして心より感謝申し上げます。

また、記念事業の実施にあたり、ご協力をいただいた137の設計者、施工者の皆様には厚くお礼申し上げます。

この記念誌の発行により、これまで受賞された優れた建築物を改めて称賛するとともに、中部建築賞のさらなる発展の一助になれば幸いです。

皆様方には、一層のご支援とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

50周年記念シンポジウム

中部建築賞の50年

日 時：平成30年12月10日（月）

会 場：名鉄ニューグランドホテル 椿の間

パネラー：五十嵐 太郎／東北大学大学院教授

栗生 明／建築家

瀬口 哲夫／名古屋市立大学名誉教授

水野 一郎／金沢工業大学教授

鈴木 利明／建築家〔進行役〕

（敬称略）

司会: それでは皆さまお待たせいたしました。お時間となりましたので、ただ今より中部建築賞50周年記念シンポジウムを開催させていただきたいと存じます。

本日、ご登壇いただいておりますパネラーの先生方をご紹介させていただきたいと存じます。なお、詳しいプロフィールにつきましては、皆さまお手元にお持ちいただいております資料の中にプロフィールがございますので、そちらをご参照いただきますようお願いいたします。

それではまずは皆さまから向かって左側よりご紹介をさせていただきます。

栗生 明様でございます。五十嵐太郎様でございます。瀬口 哲夫様でございます。水野一郎様でございます。続いて皆さま向かっていただきまして右側のテーブル、本日のシンポジウムの進行をお願いいたしております、鈴木 利明様でございます。以上の先生方に行っていただきます。

ではここからの進行は鈴木様、どうぞよろしくお願いいたします。

鈴木: それでは、今日の進行役を仰せつかりました鈴木です。たいへん不慣れでございますが、パネラーの先生方、会場の皆さま、どうぞよろしくお願いたします。

中部建築賞の50年というテーマでございます、まず取っ掛かりに私のほうからこのテーマに沿いまして、私が生きてきました経歴といいますが、自己紹介を簡単にさせていただきます。

私は愛知県の片隅で生まれて育ちまして、東京へ出て大学・大学院で建築を学んだ後に、東京で大手の設計事務所に入社いたしました。全国ネットでものを考えるというスタンスは大事にしながらも、でも、建築という仕事は地域に、それから人に根ざしてくるというものだと思っておりましたし、地域独特のいろいろ環境とか歴史文化とか、そういう中に新しく社会資産を作り出ささせていただくというたいへん大それた仕事でございます。ですから、何よりも地域に根ざすということが大事だと思ひまして、会社のほうに勝手を申しまして、中部にあります支社をフランチャイズに定めて活動させて



鈴木 利明氏

ほしいということで、それ以来40年、中部地区で仕事をするということを中心に活動実績としてやってまいりました。したがって、中部建築賞50年の歴史のまっただ中の40年という間は応募者側として、この中部建築賞を一つの目標とし、あるいはモチベーションのベースとして、当落や入賞・入選評価に一喜一憂しながら過ごしてきたという人間でございます。

それが4年前に会社勤めを卒業しまして、早々の頃に今度は審査員としてやってもらえないかというようなオファーをいただきました。これは今まで以上にこの中部建築賞が建築主・設計者・施工者三位一体となった皆さんの情熱と努力の賜物であるそれを審査するという、またたいへんな役割をいただきました。以来今年で3年生、たいへん身の引き締まる思いで引き受けて、その業務に携わらせてもらっています。それで、現在に至るという状態です。

今日は先生方に順番に自己紹介がてら中部建築賞に対する関わり、あるいは思いのところをまずお話しただいて、スタートしたいと思います。こちらの手前側、栗生先生から。すみません、一人7分から8分ぐらいを目安にお願いします。

栗生: どうもこんにちは。今、鈴木さんからお話をいただきましたけども、ほぼ年代が同じだと思うのですが、50年前を振り返ると私の場合は大学の3年生でした。ちょうど東京オリンピックと大阪万博の狭間の年でした。卒業後、約10年間榎事務所及び榎研究室におりまして、ちょうど30歳で独立し

て、東京・御茶ノ水で約40年間設計事務所を続けています。そんなわけで、この中部建築賞50年の記録を見ていましたら、ちょうど私の建築人生と重なるなというふうに思っています。

それで、3年ほど前に、この中部建築賞の審査員長をやらないかというお話がありまして、悩みました。

悩んだ点は二つありました。一つ目は私は東京で生活しておりまして、東京で事務所を持っている。中部地区に特に詳しいわけではありません。ですけれども、中部地区9県ありますが、そのうちの静岡、愛知、三重それから長野、富山、石川6県で実際に設計をいたしました。それぞれの土地の風土と先ほど鈴木さんもおっしゃっていましたが、そのたびに一生懸命勉強して、その風土に合った建築をつくりたいということで進めてまいりました。けれども、私自身はそこに住んでいるわけではないので、住んでいる人と同じようなスタンスで建築にかかわれるかという、ちょっとそこは疑問だなというふうに思った点が第1点です。ただし、今日、過去のものを見ていたのですけれども、審査員長はほとんど東京の方なんですね。それは逆に言うと、その地域にどっぷり浸かってものを見るのではなくて、相対的にものを見ていくという視点といいますか、少し第三者的な目でものを見ていくということを審査員長は求められているのかなと思いました。

それから、2点目ですけれども、実は私は中部建築賞をいただいたことがないんです。それが審査

員長やっていいのかというようなことを、ちょっと疑念を持ちました。と言いますのは、実は私は先ほども言いましたけれども、六つの県で設計をいたしました。この歴史ある中部建築賞はもちろんよく知っていたんですけれども、よく知っていながら私自身は応募資格がないのかなというふうに勝手な思い込みがありまして、応募したことはないのです。ですから、当然賞がいただけるわけではないということで、残念ながら受賞作はない。それが審査員長をやっているのかという疑念です。その二つの点でちょっと悩んだのです。けれども、いい機会だからそれぞれの地域に行って、その地域のことをよく知るきっかけになるのではないかなということで、お引き受けいたしました。

そんなことで、やはり建築を見るときに爪先立って飛び回るようなダンスではなくて、地唄舞のように足をしっかり大地につけて、建築を考えるいい機会になっているのではないかなと思っています。時間的に限られているようですので、私はまずこのくらいにいたします。

鈴木: ありがとうございます。では続きまして、五十嵐先生お願いします。

五十嵐: はい、五十嵐です。中部建築賞50年ということで、おめでとうございます。

50年というのは鑑みると、今51歳なので、ちょうど僕が生まれた頃にこの賞ができたのかということです。国内にある建築の賞の中では結構長いですね。日本のほかの地域の東北住宅大賞は審査員としてかかわらせてもらっていますが、それも10年ちょっと前ぐらいですし、世界的に有名なプリツカー賞あるいはヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展の金獅子賞の始まりは1979年とか80年ぐらいで、そうやって考えると結構長い歴史があるんだなというのを改めて思いました。

それで、20周年記念の座談会か何かで読ませていただいたときに、もともと始まったきっかけに建築批評家の浜口隆一さんがかかわっていたということを知りました。僕自身も自分は設計する立場にはないので、浜口さんの存在が大きかったことを知って、感銘を受けました。それで、彼が北海道に



栗生 明氏



五十嵐 太郎 氏

いたりとか掛川に住んだりということで、東京にいなかったということも重要だったのではないかなというふうに思いました。

それで、今回「50年の記録」という冊子を少し事前に拝見させていただいて、やはり50年という時間の厚みが出てくると、アーカイブとしての価値がとても出てきていて、1年2年ではできないものなのですけれども、やはりずっと継続して積み重ねていくと、いろいろ後から考えが読み取れるようなこともあります。毎回講評もあるようなので、こういった講評などをベースにさらに研究というか分析というか、大学で教えていますので、そういう研究がテーマにもなりそうだなというのを、この50年の蓄積の中から少し感じました。

あと場所として、地域ということかというと、僕自身は生まれたときはフランスだったので5歳までフランスのパリにいたんですけども、小中高は金沢に住んでいました。その後大学は東京で、2002年から2005年にこちら名古屋の中部大学で教鞭を執ったということで、東海地区とのご縁ができたのです。その後はずっと仙台の東北大で教えています。

そういう意味で、東京で建築の勉強を始めたんですけども、どうしても特に僕の場合原稿を書く仕事が多いので、メディアとの関係が多いです。東京にいと全然気づかないのですが、名古屋あるいは仙台を拠点にしながら活動すると、本当に東京にほとんどのメディアが集中している。昔はまだそれでも、たぶん雑誌の取材予算があったので結構地

域を回っていたと思うんですが、最近はそういうのも厳しそうです。ですので、余計メディアの集中による歪みもきっと生まれていると思います。こういう賞というのはアーカイブでもあるし、一種のメディアみたいなのところも僕はあると思うので、東京だけではなくて地域でどういうふうに出ているかというのを、きちんと丁寧に見る、そういうきっかけになるかなと思います。

あとは、さっき言ったように金沢で小中高を過ごして、その後で名古屋で教えることになったんですけども、同じ中部に括られているというので、これは本当に広域なエリアをカバーしているんだなということで、審査を担当されている方、本当にご苦労様ですというふうに思いました。

東北のほうでは今、東北住宅大賞というのに11年ほどかわらせていただいています。東北もそれなりに広いですけど、でも住宅ばかりで東北6県なので、比較的毎回東北らしさというのは何だろうということを議論しているんです。この中部建築賞はさらに広いので、どういう論点が出てくるのかなというのは、またちょっと後半の議論できるといいかなというふうに思います。以上です。

鈴木:じゃあ続きまして瀬口先生お願いします。

瀬口:瀬口です。今話がありました建築評論家の浜口隆一さんが名古屋に来て、地域の建築の賞をつくらうかということ昭和42年ぐらいに提唱したわけです。その話の相手が、当時、名古屋で建築の新聞、中部建設新聞というのを3年ぐらい前に創刊していた杉浦登志彦という人です。その人が建築活動として東京からいろんな人を呼んで、名古屋の建築設計関係者と懇話会とか座談会というのをやっていた。こうした中で、この話が出たということになっています。そのときのスタンスというのは、今話があったように、建築の世界もやはり東京が中心だった。高度経済成長や東京オリンピックの中で、それだけでいいのかという反省があって、地域主権、リージョナリティということへの関心がかなり大きくなってきていたと思います。私も鈴木さんもほぼ同じ世代ですが、地方というものをやはり考えて、地域を主体的にして、建築も考えていく

べきだという感覚が出てきた時期だと思います。

それでは具体的にどうやるかということで、先ほどの杉浦登志彦さんの事務所を準備事務所にした。浜口隆一さんは東京の人です。晩年は、掛川にも晩年住んでおりましたけれども、外の人ですので、それじゃあだめで、名古屋在住の人が中心になる必要がある。そこで当時名古屋の建築界の中心になっていた石原巖という人に話を持って行った。石原巖という人は愛知県の建築課にいて、それから、戦後は建築学会の支部長だとか愛知建築士会の会長などをちょうどやっておられたので、建築界の中心的存在だったんです。その人に話をしたら、ぜひ何でも協力しようということだった。さらに当時の建築家協会支部長の濱田瑞穂さん、あるいは愛知県建築課の小林さんなんかに協力を要請して、それから具体的な行動になっていく。そういうことで廣瀬一良という、建築家協会の支部長もやった人だと思いますけど、その方を世話人にして準備会がつくられた。一方、ちょうどその頃、名鉄が博物館明治村を開村した時期でした。それで、やはり建築の人だけで話していると広がりがいいので経済界の人を巻き込もうということで、明治村絡みで土川さんに話をしたらいいんじゃないかということで、名古屋商工会議所の会頭、それから中部開発センターの会長を務めていた土川さんに話を持っていった。会長としてやってはもらえないかということで、この土川さんの協力を得たことが大きく動き出すきっかけになったと思います。



瀬口 哲夫 氏

それで、当時（昭和41年）、中部圏開発整備法という、この地域の地域開発の法律ができるわけです。それは東海と北陸とを一体的に開発をしているというもので、土川さんはその経済界の中心です。建築の人たちの発想はたぶん東海地区ぐらいの発想だったと思うんですけど、経済界に持っていって中部圏だという話になって。これは証拠があるわけではなくて、私がそうだろうと思っているだけですけれども。それで中部圏にしようということになる。今度はその建築界の人が、東海支部さらに北陸のそれぞれの支部長あるいは関係者に働きかけて、先ほど紹介がありました昭和44年2月に、中部建築賞が正式に発足したということではないかなと思っています。

したがって、最初はやはり建築団体が母体でスタートして、経済界に広がったという形になったというふうに私は理解しています。ですから、最初の審査員の名簿などを見ると、各地域の士会の代表、それから家協会（建築家協会）の代表、さらに、各県の建築関係者の代表という形の中に、大学の先生とかが加わっている。最近の審査員名簿を見ますと、みんな建築家という肩書になっているので、「何か考えが変わったのかな」と思いました。いずれにしろ、基本的には最初は各地域、それから地域主体。これが非常に重要だったんじゃないかなと私は思っています。

それが東京とは違う、あるいは関西とも違う、北海道とも九州とも違うという、中部の中で建築を設計する人、施工する人、建築を発注する人にやはり建築のことを分かってもらって、いい建築をつくっていく。いい設計をして、いい施工をするという形が建築文化を広げることだというのが、中部建築賞の基本的な考えの始まりだったんじゃないかと私は思っています。

ちょっと短いかもしれませんが、そんな印象です。私自身は中部建築賞には何らかかわりもないんですけど、今日はこの話をするために「お前来てくれ」と。最初のきっかけをつくった中部建築ジャーナル（杉浦登志彦創刊）が、建築の世界に留まってはいけないと、やはり一般市民の中に建築

文化を広げなきゃいけないということで、C&D（現在、名古屋CDフォーラム）という組織を作ったのです。それは建築の人だけじゃなくて、建築は総合芸術だという視点で、芸術をやっている人とか陶芸をやっている人とか、書道家などいろいろな人に参加してもらって活動をしています。こうした組織が大体同じ時期に創設されて、今年が50年になりました。私がここ10年ぐらい代表を務めているので、どなたか私を出せというふうになったということで、今日は、中部建築賞の前史を話させていただきます。

鈴木：はい、ありがとうございました。なかなか聞けないお話だと思います。続きまして水野先生、よろしくをお願いします。

水野：私は応募する側でずっとやってまいりました。私は東京の大谷研究室にいたんですけど、大谷研究室でやった仕事は金沢工業大学の建物ですが3点賞をいただいたし、それから、独立して作った金沢計画研究所では14点の賞をいただきました。

最初にいただいたのが、第1回目のときに金沢工業大学本館でいただきました。このときは大谷先生がちょうど大学紛争で、学生との団交の先端に立っておりまして、現場の途中で安田講堂の占拠事件なんていうのがありました。その激しいときに、大谷先生が金沢工大の仕事を引き受けまして、どうしようかと非常に悩まれました。学生と教員と職員が対立して争っていたのが学生紛争の形なんですけれども、その三者が、例えばこういう大きな空間の



水野 一郎 氏

中に一体に交わっちゃう計画を立てようというので、そんな計画を立てたんです。そしたら、施主のほうから反対が出るかなと思ったんですけど、施主のほうはそれはおもしろい、やろうじゃないかという大決断を下しまして、やることになったんです。

そのときにもう一つのテーマがありましたのは、私どもの初めての経験でしたので、雪国というのをどう克服するかということです。例えば太平洋側の上智大学なり早稲田大学なり東京大学なりをやっても、広場というのは外につくればよかったです。けれども、雪国では12月から3月まで外は使えないという状況の中で、屋内に広場をつくりました。その三者が全部、その空間の中で一緒にいるという屋内広場をつくったんですね。そうすると、どうなるのか。雪国だからという理由で三者を一体にしたように思われるかもしれませんが、三位一体にすることが最初にあって、雪国だからということで広場を設けるんだと。そういう地域の風土みたいな話と、大学がどうあるべきかということの、非常にぎりぎりのところの戦いをしたわけです。

その頃大学のキャンパス・校舎のつくり方というのは、レンタブル比って皆さんご存知ですね。建物の延べ床面積のうち、通路関係が大体17、8%がスタンダードだという、20%超えたら、もうそれは動線計画がうまくいっていない証拠だというようなことでもございましたけれども、そのプロジェクトでは35%近くいって、倍近くが通路区画なのです。屋内広場をいっぱいつくっていますから、学生が学内に滞留するということです。

そんな設計をして、果たしてこれで評価されるんだろうかというのは非常に心配で。応募したときに、第1回目の表彰でどんな表彰なのか分からないけれども、とにかく学校側も私たちも大冒険をしたので、どう評価されるかなというのが非常に興味があったんです。そうしたらいただきまして、お互いに喜んでいたので、これであとはどう運営するかが勝負なのだかと、ここまでは来たんだという、そういう自分たちの自己確認をさせていただいた賞でございました。

その後、私は、大谷研究室ではなく金沢工大に

勤めてやったのがライブラリーセンターという仕事でございました。これは施主の企画側におりましたので、施主側で表彰を受けました。その後独立してから14点の賞をいただいたんですが、そのときもいろいろなことと戦いながらやってきたことが評価されるかな、どうかという気持ちで応募しています、あまりデザイン主義じゃなくて、こうあるべきだろうみたいなことをずっと積み重ねてまいりました。

ですから、中部建築賞の中部らしさというよりも、雪国らしさとかあるいは金沢らしさとか、あるいは地球環境のこととか、あるいはSDGsのこととか、あるいはバリアフリーのこととか、そんなような各テーマを掲げながらやってきたことがどう評価されるかが毎回楽しみでございます。一つ最初にそういうご報告をしたいと思います。

鈴木: ありがとうございます。4人の先生方それぞれこの場に来ていただいて、期待通りの内容を少しずつ触れていただきました。

これから先、ちょっと時間は限られておりますが、30分少しの間、自由にそのへんから議論を進めてまいりたいと思います。まず、それぞれのお立場で中部建築賞への思いを言っていたいたんですが、その中で少し共通する要素をピックアップしてお話を進めてまいりたいと思いますが、いかがでしょうか。4人の先生方で、特にこの点少し突っ込んでみたらというご提案がありましたらお願いしたいと思うんですが、どうでしょうか。

栗生: いいですか。

鈴木: お願いします。

栗生: 最後に水野先生が、雪国のお話をされました。それから五十嵐先生は、出版業界が東京に集中しているという話をされました。私も東京で仕事していますから、東京と中部地区というのを対比的に考えてみます。ある人が、今日本にいないものは三つあると言うのです。一つは東京はいないんじゃないかと。東京はいない。東京があるから一極集中して地方が疲弊するんだと。だから、東京はいない、辞めちまえ。辞めちまえというか、東京の役割を放棄しなさいと言うんです。

二つ目は車はいらんんじゃないかと。車が諸悪の根源であるというような言い方。地球環境の問題もあったり、あるいは地域を車が分断しているような問題があたりとか。

それから三番目は、携帯電話いらんよと。

この三つだと言うのです。この三つがなくなると、ずいぶん世の中が変わるよということです。価値というのは、片方でAというものに価値があるとする、それに相対する反対の価値も、常に意識しながらものを見ていくことが必要だなというふうに思います。

そういう意味で、中部建築賞というのは、先ほども言いましたけれども、地域に根差した、つまり気候・風土、それから人間の生活・生業・文化・歴史そういったものが、同じ中部でも静岡県側、つまり太平洋側と、富山とか石川県のように日本海側で明らかに違うんです。実際に審査で行ってみますと、同じ中部でくくっていいものだろうかというぐらい違うんです。ただそこでの、特に現地審査って非常に重要だと思うんですけども、行ってオーナーの方々とお話すると、そのオーナーの方の持っている物語・歴史というものがよく分かってくる。

なるほど、だからこの建築があるんだ、だからこういう形になったんだ。こういうつなぎ方、こういう使いこなし方というものが、この地域に一番ふさわしいものなんだということが腑に落ちることが非常に多いんです。そういった意味で、中部地区のそれぞれの地域地域で持っている固有性といいますが、そういうものをどのぐらいうまく引き出せているかということ、これが私が審査して回っていくときの一つの観点です。

片一方では、さっきグローバリズムという話がありました。あるいは、インターネット社会ということで、あらゆる情報が瞬時に、同時に受け取れる時代です。ですから最新技術、あるいは最新の材料というのを共通して得られるわけですから、そういうものはそういうものとして享受しながら、片一方で人間の肌触りみたいなもの、身体感覚みたいなものを、どういうふうに建築の中に盛り込んでいくか。特に、地域と密着にした身体感覚というもの

が、その建築の価値を決めているのではないかなというふうに私は思っています。

五十嵐：地域らしさの話が出たので、先ほど僕も東北の話、東北らしさの話をしたので付け加えますが、JIAの東北支部が東北住宅大賞を創設して、古谷誠章先生と僕で最初の大体10回、僕が11回やっただんです。東北らしさというのは企画者サイドであるJIAさんが毎回出している評価項目で、審査している我々が、この意味は何なんだろうと毎回悩みながらやっています。

もちろん、東北には、やはり雪が降ったり本当に寒いところがあって、そういうところに行くと、例えば東京でオープンハウスで普通に住宅を見に行く時とは全然違う問題設定がそもそも課せられている。それを、どうやって豊かに建築的に、あるいは空間として、つまり設備装置に頼るだけではなく、いろんな解き方があると、また教えられたりするんですけども。

一方で、仙台の町の中に建っているような住宅なんていうのは、わりと東京に結構近かったりして、本当に東北の中でもまた全然違う地域差があるということ、ある意味毎回発見している。それは、10年続けたおかげというのもあるんですけども。東北らしさ・地域らしさというのは、ともすればある決まったパターンに押し付けてしまう方向にも下手をすると流れやすいので、むしろ新しく発見していくとか。つまりその地域らしさ、場所らしさを審査をする場合、建築家のクリエイティビティーによって、何か発見していく多様性というか、そういうようなものをむしろ積極的に評価していくという考え方があるんじゃないかというふうに、かかわりながら思いました。

瀬口：地域性の重要性について、二人が語っていただいたので、それはまさにそのとおりだと思います。私が大学院の時に、大学院の先輩たちが九州で設計をしたんです。そうしたら先生が怒って、大体、東京から九州に行って設計するものじゃないと言ったということです。そのことはどういうことかということで、私どもが大学院にいる時に議論していたローカリティーというのは、やはり地域のものは地

域の人たちが設計しなきゃいけないんだ、地域の人たちが育てていかなきゃいけないということだったんじゃないかなと思います。

私は名古屋で就職させてもらいましたが、東京の人たちが見る視点というのは、たぶん全国の建築の水準、日本の建築がどうかという視点で設計したり、議論している。しかし、そうじゃなくて、名古屋にいて名古屋の視点で建築を設計する、あるいは地域にどんな建築があるんだと。個人的には、大学人として地域の建築をきちんと記録しておいて、みんなに伝えていって、地域の人たちが考えることが大切なんじゃないか。東京から見るのではなく、自分のいる地域から見て、考え、行動することが大切ではないか。さっき鈴木さんが、東京本社ではなく、いろんな事情があるかもしれませんが、名古屋支社ですっと仕事をしたいということを言われたというのは、一つの流れだなと思います。

ローカリティーとグローバリズムの問題というのがあるんです。だからと言って、地域に閉塞して閉じこもるといふふうには考えていないんですけども。そういう意識が地域の人たちにないと、やはりだめなんじゃないか。クライアントにもないといけないし、つくる人にもないといけないし、設計する人もないといけないんじゃないかなというふうに、私自身はずっと思っています。中部建築賞への期待はそこにある。じゃあその人たちが地域にどう影響を与えたかというのは、今の段階ではまだ分かりません。ちょっと調べていないので。いずれにしろ50年で今1000件以上受賞をしている。とてもこれは大変なことだと思います。どういう意味で大変なことかという、受賞した建築は少なくとも存在したことが分かるということです。いくら一生懸命設計しても、人知れずなくなっている建築のほうが多いのだから、賞をもらったということは、必ずこの時点であったということです。それが生き残るかどうか、これはまた別の話ですが。日本の建築というのは、どんどんつくっては壊し、つくっては壊します。その時に、いろんな思いを設計者が言っていますけれども、50年経つとみんな消えてしまって、やはり建築の本質しか残らないんじ

ゃないかと私は思っている。だから、これは一つのベースで、また50年経った時に、受賞建築がどれだけ残しているのか、どれだけ魂をこめて設計しているのかということが見られるかなと思うんです。

直近で考えると、豊田市の景観審議会の会長をしていますので、豊田市ではどれくらいもらったんだろうかとちょっと調べてみたら、50年で17件受賞しているのです。大体2年から3年に一つ。受賞しているものは、ほとんど大きい公共建築です。地域の景観賞とか、いろいろ審査に私もかかわっていますけれども、基本的には受賞対象に住宅を増やせとか、公共建築は外せとかいう意見が強いことがあります。そうすると大体大きい建築が外れてしまう。都市景観への貢献とか、市民に建築を理解してもらおうのは、公共建築は外せないように思う。

しかし、中部建築賞は公共建築を外していないので、やはりお金がかかったというか、地域の文化にとって重要な建築が、皆さんの手によって作られていることがわかるので、豊田市で中心市街地にある大規模な建築は、ほとんど中部建築賞をもらっています。

しかも面白いなと思ったのは、豊田市立図書館。1970年の竣工で、わずか50年経っていないが、新しい図書館(参合館)が駅前につくられた。私は築50年くらいでは、新築だと言っていますけれども、それでは旧豊田市立図書館はどうなったか。これ問題ですよ。しかし、幸いなことに、壊されずに資料館として使われている。そういうふうに、やっぱり大切にしておいて使ってもらおうのが大切だなと。

私も1970年代に、村松(貞次郎)先生、藤森(照信)さん、堀(勇良)さんたちの近代建築の全国調査に関わってきました。調査からすでに40年経っていると思いますけれども、その時に、収録しているものは13,000件ほどでリストアップされた中で、大切にしてほしい近代建築(2,800ほど)の所有者にお願い状を出そうと。近代建築、私たちの言葉で言うと明治以降から戦前の建物ですけれども、戦前の建物にはとりあえず明治建築、それから大正、昭和戦前建築があります。こういう建築が大切なんですと、建築学会の歴史・意匠委員

会の小委員会の名前でお願い状を出したんです。そうしますと、やはり聞いてくれるところと聞いてくれないところがあるのですけれども、岡崎信用金庫の資料館、これは鈴木禎次の設計になっていますが、現在保存公開されている。その時のお願い状がちゃんととってありました。つまり、その時にお願いして、外部の人たち・専門家がこの建築はいいですよといったものを、受け止めてくれている施主・所有者がいるということです。

ですから、中部建築賞についても同じですね。これはできた瞬間なので、まだ評価が定まっていない。私が言うとおちよとおこがましいんですけども。時間を経た評価を得ていない。いいものを選んでいいますけれども、できた瞬間は審査員の方が慎重に。10年20年30年経つと、やっぱりいろんな条件で壊される。時間、機能、それから建築の良さと別の理由で壊されることがあるので、その時に思いとどまってくれるのは施主の考えだと思うんです。

今日表彰された名古屋銀行本店。あれも、私も何回も当時の東海銀行に保存要望書を持っていきました。もう所有者は変わりましたが、現在の所有者である三菱地所がやはりきちんと残してくれたんだと。内部は改変していますが、それでも外観がきちんと残って、昭和初期の建築が、今年中部建築賞をもらうことになった。そういう意味で作品としては優れたものを残してくれたと思います。

中部建築賞は50年経ったのですけれども、まだ最初の1回目受賞のものが50年経っただけです。今年の受賞のものはまだ0歳なので。そういうことで、非常に価値がある賞だなと。ローカリティーというのが非常に重要、それからこういう賞を地域が持っていることは非常に重要だなとっております。**水野**: 私は先ほどちょっと申しましたように設計をしているんですけども、一方、大学で教えている関係もありまして、授業として使ったりするんです。一つ、やはり建築の設計をしながら、そういう建築文化を広める運動体みたいな形ですね、運動を展開していきたいなとも思っております。

例えば、雪国の建築というテーマでいきますと、私が金沢に移り住んだ42~43年前は、住宅を建てるというと、『モダンリビング』とか、『サンケイハウス』とか、そういった住宅雑誌にいっぱい付箋を入れてきて、これとこれとこれで、部屋はこんなんで外観はこんなんで、お庭はこんなんで、同じもの造れという要望が出ますが、その中には雪国というテーマは一つも入っていないというのが実情でございました。

そういうのはおかしいんじゃないのということで、金沢の都心の町家の雪対策、それから町並みの雪対策、それから農村に行って、農村での雪対策と農村集落の村づくり、それから山村の豪雪地に行って、山村の建物の雪対策。それから集落としての村づくりの対策と、いろんな段階でデータが出てくるんです。そういったものに対して、一つも現代の建築、住宅をつくるときにストックが意外と生きていないという、そんな状態が分かったら、これは何とかしなくちゃならないというふうに考えて、現代建築の中でいろいろ生かしていくわけです。

つくっていったものを中部建築賞で表彰していただいて。表彰していただくと、テキストをつくったり、あるいは講演会をやったりして、こういうふうになると太平洋側と違う住宅が自然にできてくると。それが住みやすさと長寿命と、いろんなことにつながるんだという話をするようになるんです。そういう時に勇気ももらえるものとして、ある意味ではお墨付きとして、中部建築賞がすいぶん私にとって役に立ちました。

それから、例えば日本の建設省の方針を変えたことでもあるんですが、戦後公営住宅は全部不燃化しなさいと言われてたんです。要するに、火災に対して弱い日本国土を作り替えるというので、都市計画でもほとんどの都市の都心は準防火か防火になっていると思います。要するに不燃化というのは戦後の大テーマでございました。ですから、公営住宅を造るのに全部不燃化しなさいと。最低でも軽量鉄骨、ブロック造、あるいはコンクリート造です。

それで、ある石川県の山村の、公営住宅10戸をつくってくれと言われてた時に、アンケートを取った

ら、木造の公営住宅をつくってほしいという要望なんです。そこは山村ですから、当然ながら杉の美林がいっぱい残っているんです。大工さんもいるんです。それで、1戸当たり1千万のお金をかけるということになるのですが、それを不燃化してコンクリートでつくったとしたら、1千万の投資をしても80パーセントぐらいは村外へお金が流れていくのです。それに対して、その美林を使って地元の大工さんがやると、逆に8割ぐらい村に残るわけです。村で修繕もできるのです。

どうしてこんな過疎の村なのに、コンクリートにしないといけないのかというのが分からないというので、建設省のほうにこういうふうにしてほしいと要望を出すわけです。そうするとだめだと。でも、みんながアンケートを取ったり我慢ならないと、御百度参りみたいな形で、何度も繰り返して行っていたんです。そうしたら建設省も、しょうがない、特例だ、認めようとなって、木造を認めました。そのころまでは、通達でだめだとなっていたんですけども、木造を特例という形で認めてくれたんですが、実はそれが竣工したとたんに、全国から視察が来まして、自分のところも木造にしたいということになってきて。そうすると、建設省もちょっとだまっていらなくなって、その作品に対して中部建築賞の後に、建設大臣表彰を出すと言ったんです。そして、自分たちの通達を変えて、これからはその地域に合った構造形式を取っていいですよというふうに方針転換したのです。

そういう運動体、先ほど言いましたけれども、地域にこだわって行って、それをその地域がいいねと言っていただくことというのは、運動体をやる者にとって非常にいいストーリーが描ける、そんなふうに思っております。そんなことは、金沢の町づくりや工芸とかいろんなことをやっていると、一つ一つのテーマが成立してくる。それは地域から出てくるテーマがいっぱいあるというふうに思います。

だから中部全体というよりも、私の住んでいるところにこだわるだけですけども、そんなこだわりの中からストーリーを見つけて行って、それをみんなまで評価していく。そういう地域社会、地域の建築

文化、そういう膨らみみたいなものを感じております。

鈴木: ありがとうございます。

今日、本当に基本的に一番、それぞれいいところを突いてお話いただきました。いわば建築のローカリティーといえますか、ローカルでありながら、どうやって全体を見渡すような発信ができていますか。今、最後のお話のように、地域から発信しながら建築文化を全国的に、あるいは皆さんに注目していただく。それがムーブメントまでつながる。それに中部建築賞が一役買って来たというような、大変力強いお話を幾つかいただきました。

私も、この中部建築賞というのは中部9県、東海圏だけでなく、北陸などもあわせて中部9県、それぞれ、本当はローカリティーとしては、別々のところを持ったところが集まって賞をして、みんな違ってみんないいみたいな感じを、お互いをリスペクトしながら高め合ってきているということ。それが素晴らしいなと思っています。

今このお話を続けると、ずいぶん長くかかりそうですけれども、ちょっと時間の制約もありまして、少し中部建築賞の進め方といえますか、今までと今後について、何か具体的な踏み込み方、提案みたいなものがないかなということ、ちょっと探してみたいと思うんですが。

例えば、今申しました中部9県をもって、中部圏という経済的なところからベースが来ているらしいですけれども、そういうところの集まりでやっているということとか、あくまでも建築主・設計者・施工者の三位一体で応募していただく賞であるとか。さらには、今現状で一般部門と住宅部門という二つの項目があります。住宅部門はまた別の賞みたいなものですが、そういう中でなかなかうまく、そういう大枠だけじゃ済まないような、おおよその規模とかジャンルとか。

ちょうど20周年の時に、ウェイト制みたいなことが話題になっていたと思いますけれども、そのへんの選別はどうなるだろうかということとか。あるいは現状で大賞というのを持たない賞でありまして、入賞、入選、それから特別賞の3評価区分で

の運用、特に特別賞の運用でやり繰りをしているという感覚はありますが、このへんの具体的なことについて、何か全国的な賞とか、あるいは直接審査等に携わって、ご意見とかがありましたら伺いたいと思いますが、いかがでしょうか。

五十嵐: 私のほうから。今、最後に言っていた大賞ですが、本当にえいやって決めるところもあると思うんです。先ほどの話でいくと、歴史の審判がまだほとんどない時に、その時点でそう思ったということもまた歴史的な事実であり、そのこともまたある意味を持っていて。それで、やはり大賞があると、その年を代表する、それはまたいろんな視点でつけられると思いますが、第三者から見ると、もう少し見やすいということももちろんあるし、何よりもその議論が知りたいなというか面白いなと思うんですね。

ちょうど50年ということで思い出したんですが、京都賞の審査にかかわったことがあって、京都賞で審査員が議論したことは、50年後にすべて公開されるんです。50年後、大体関係者みんなこの世にいないんじゃないかということをつぶし前提にして、悪口を言ったこともすべて記録化されている。実はノーベル賞がその仕組みをとっていて、毎年議論をする時に、何をナンバーワンとするかということで、つぶし喧々譁々の議論があって、だから良くないみたいなそんな意見も含めて出て、でも、それを将来、明らかにすると。差し障りがあるけれども、完全には隠蔽しない、記録は50年後にすべて公開する、京都賞はこれを参考にしています。

僕は別に、個人的には自分が審査員だったら、別に一般公開で、そのまま審査をやってもいいと思うんですけれども、そういうやり方もあって。それで、さっき言ったアーカイブ的な価値があるということもそうですけれども、個別の公表ももちろん重要ですが、その時何を大事だと思っていたかというそのへんの空気感を、後の時代から見た時に知りたいなというのがあって。だからやはり、大賞とかがあると、議論が盛り上がる。

特に、例えばBCS賞は大賞がつかないし、ここと似ていて、いわゆる事業主と施工者と設計者の三

位一体と同じですけれども、ボーダーを決める審査なので、基本的にナンバーワンは決めない。そうすると、明らかにいいやつは、もうみんな議論しないんですよ。もうこれは絶対いいだろうというやつは議論しなくて、むしろボーダーのところまでどこから入れて入れないかというところの議論が集中しちゃう。やはりボーダーよりも、どれが一番なのかという話が刺激的です。それは後から見た時に、あの時こんなこと考えていたんだ、外れたねと思われることもきっとあると思うんですけど、でもそういう議論は非常に面白い。

あとは、賞のブランディングということについて、グッドデザイン賞は来場者も投票できることで、一般の人を巻き込んでいる。グッドデザイン賞が何であんなに有名になっているかというと、かなりイベント的な演出になってはいるけれども、賞が決まる瞬間みたいなものを一つのイベントにする。そのことによって、非常に知名度の高い賞になっていて、たぶん一般のクライアントの中では知名度が最も高い賞になっている。応募の費用は高いと思っている

んですけど、賞の中でそこまでブランディングできたのは、たぶんそういう大賞が決まるということのニュース性が重要です。それはたぶんメディアの報道で、いわゆる小説の芥川賞は、大体候補になっている小説家が、電話の横で待っている定番のシーンがあるじゃないですか。

それで日本建築学会賞は、理事会の承認を得て決まるのに時間がかかります。それだとニュースとしてはなかなか報道されないと思います。個人的にはそういう大賞みたいなものも、ぜひご検討されるといいのかなと思いました。

栗生:今の五十嵐さんのお話を受けてですけど、よくコンペだとかプロポーザルで1等を決める時というのは、みんなの意見の相場でものが決まるのではなくて、「1等としてどんなものがいいのか」、「1等とは何か」というような議論が必ずあるんですね。だから少数意見でも、この時代この内容であれば、これが1等にふさわしいのではないかという、ある種の時代性みたいなものが汲みとられることになってくる。



ここがたぶん、審査会は常に責任を持つというような構図になっていると思うんです。ですから今の形だと、おしなべて多数決で大体決まってしまうというところが多いんですけども、たぶん大賞ということになると議論百出で、「今年の大賞は何か」という議論を収めんと、かなりその時代を表徴するというんですか、そういうものになりやすいのではないかと、話題性にもつながるのではないかと、ということだと思えます。

流行語大賞というのがありますよね。「そだねー」というのに今年は決まらなかったんですけども、たぶんたくさん候補がある中で大賞は何かという時の議論は、ずいぶん尽くされたらうと。たぶん、それを50年後になるのか分からないけれども、公表されると面白い。その時代の力関係みたいなものが絡んでいたりするのかもしれないですけども、面白いなと思えますね。

鈴木: ほかいかがでしょうか。

瀬口: そのとおりだと思いますけれども、やっぱり賞の目的で決まるのではないかなと思うんです。グッドデザイン賞は確かに、身近な生活用具みたいなもののデザインから建築までを含めている。一方、専門家が自分の思いこみで美しいというものが一般に評価されない場合が結構あるのではないかと。そういう意味では、ユーザーの意見というのは非常に貴重。

建築の場合にじゃあどうするかということがあって、この特別賞というのを設けるのは面白いなと思います。そのときに、今の中部建築賞というものの主旨ですね。建築文化をもっと広く分かってほしいということからスタートしていて、それは私がさっきローカリズム的にしゃべっているわけですけど、地域的の評価されたものが50年経って日本の建築に訴える作品がすでにここで出ているということになれば、特別賞を出してもらったらいいなと思います。そのときの審査員の評価の仕方がわかる。それはやはり日本の建築全体に影響を与える。歴史的にそれぞれの時代の代表的な建築が出てくると思うので、その中に入るような建築を特別賞にしたら、それはようやくローカルなものが、グローバル

になってきたなと。

中部圏は非常に温暖な気候なので、北陸のほうは気候が厳しいらしいのですが、東海は人々も温厚なので、あまり最初から高いところを狙わなくて、むしろ私の認識では、建築賞というのはどちらかというと、建築関係者が中心で、一般化していないところがある。やはりお金を出す経済界がパルクにある賞というのがものすごく強くて、経済界の人たちが建築を分かってくれる。施主側が分かってくれるということは、良い建築をつくる上で必須じゃないかと思う。そういう意味では、この賞というのは非常に価値があって、建築学会賞とかJIAの賞とは性格が違う。中部建築賞について専門家の中に出しても、すごい建築を出せるというふうになってきたら、この地域の建築のレベルが上がってきたというふうに捉えることができるので、それはぜひ検討してやっていただけたら。審査員長は大変ですけれども。

鈴木: 私自身審査員として3年生であって、いろいろと戸惑う場面というのがあります中で、今言った入賞なのか入選なのかという、私自身も応募者側に立つと、それ自体が大変気になる場面でありました。例えば特別賞、去年は都市インフラそのものを変えてしまうような名古屋駅前の大型案件が2つ。今年はお手元にあるかもしれませんが、山の中でひっそりとたたずむような、独自の宇宙を持った世界というようなことで、これはなかなか一般という同じ土俵ではかりきれない。何か特別なものにと、いう意味では、審査員の間では合意ができる範囲ということで運用しております。

私はそれはそれで構わないと思います。大賞がないというのも一つの選択だというふうに思ってはおります。

さらに何かございましたら。

水野: ちょっと私は質問から追加ですけども、先ほども運動体という言い方をしましたが、そこには二つの方向があって、一つは、ここにいる我々も含めて、建築に直接関わる者たちがもう少し向上する、研さんするという場としての賞というのがあろうかと思えます。

もう一つは、やはり先ほど五十嵐さんがおっしゃっていましたが、なんとなく文学賞などが持っているような、あるいはグッドデザイン大賞が持っているような、国民というか市民というか、そのレベルを上げるための賞という役目があると思います。

今、例えば森美術館の安藤忠雄展なんかに行きますと、建築関係以外の人のほうが客としては多いのです。そういう意味でいうと、少しずつ日本の国民の間に建築に対する見方や評価の仕方として、かなりレベルが上がってきているのじゃないかと考えていいと思っています。

40～50年前にアメリカやヨーロッパをまわったときに、「うわ、向こうの人は建築についてこんなに厳しいのか」というほど国民のレベルで厳しい批評と、それから建築自体を楽しんでいる。シカゴなんかに行きますと、本当に楽しんでいるというのが分かるんです。ああそうかと思っているうちに、日本はやはりまだ古寺巡礼みたいな感じで、古いお寺さんはすばらしい建築があるけれども、現代建築にすばらしいものがあるなんて、あまり思っていない。

そういうことに対して少し、現代建築はものすごく面白いんだよとか、何でこれが面白いのかとか、何で君たちはこれが嫌いなのかとか、そういう議論をする場所になっていけばいいなと、いつも思っているのです。

これは金沢の話ですけれども、金沢には都市美文化賞というのがあって、40周年を迎えたのですが、これは東京の設計事務所の人が、兼六園のそばに真っ黄色の旅館をつくったんです。そうしたらこれは汚いと言ってみんなは反対したんですが、でもどうするのか、これを壊せと言うのか。それは言えないから、これから汚いものは別に構わないから、いいものだったらみんなで表彰しようじゃないかと。民間人・経済人が中心となって、都市美文化賞という制度をつくったのです。そして、これが40年も50年もやって、年間10個ずつ表彰していたら50年間で500個になる。そうすると、町が変わるはずだということを考えて始めて、今40

年目ですけれども、なかなかの人気のいいですね。

こういったこと、都市美文化賞や建築賞を与えることが、なんとなく市民や県民の建築文化に対する意識を高めていってくれるというようなことにつながっているんです。ですから中部建築賞のこの立場やこの場に、どれだけ専門じゃない県民や市民がえられるかというのが気になると思います。

金沢で谷口吉生さんに講演をしてもらうと、聴衆の半分以上は建築以外なんです。ですから、少しずつ育ってきている感じがします。そういう意識の運動体みたいな形で、もう少しこの賞を県民や市民や中部民に知らせる、そして批評を仰ぐという。もしかしたら審査員の中に、そういう他ジャンルの人が入ってもいいのかもしれませんが、やっていくという。私はそんな方法が一つ、あるのかなというふうに思っております。

栗生:これは中部建築賞だけではないですが、50年前と比べて考えると、最近の応募作品はリノベーションやコンバージョンが非常に増えてきています。最初のころは、たぶん特別賞までいかなかったも、ちょっと評価を別扱いしていたと思います。先ほどの瀬口先生のお話にも保存の話ができましたけれども、そういうものに対する人々の意識が随分変わってきているなど実感します。そういう応募作が出てきて、それが評価される。そうすると若い人たちが応募しやすいという状況にもつながっているんです。

親の家に少し手を入れて同居するみたいな話とか、使われなくなった工場をオフィスとして、アトリエとして使うとか、そういうアイデアがいくらでも出てくる。それは最後のほうの議論になると思いますけれども、これからの応募の仕組みの中に、例えば私は東京建築賞の審査委員長をしていますけれども、リノベーション賞というのを別につくったんです。すると、それを目当てに応募してくる人たちが結構多く出てきたということがあって、例えば今特別賞扱いしているもので、何か将来部門として伸びていきそうなものがあるとすれば、部門をたくさんつくればいいのかという話ではないですが、新しいものの呼び水になっていくような部分がある

んではないかなと。特別賞にはたぶん、そういうところがあると思うんですね。

鈴木:いろいろありがとうございます。

水野先生の運動体という言葉が非常に懐かしく、力強く感じました。先ほどお話に出た1969年の安田講堂のとき、私は塀の中というよりも、塀の外側を取り巻いていましたけれども、その頃クラス討議などで、盛んにやっていたのが「運動体」論です。

どうやって前進するか、あるいはいろいろなものを組み込みながら、ちゃんと前に進んでいくべきか、そういう生きた運動体をつくるのが大事だということ、よく議論しておりました。今の話はとても頼もしく、我々が中部建築賞としても、これから建築文化というものを発信していくのに、一つのムーブメントの新しい一環、そういう意気込みを持つのが大事かなと思いました。

もっとじっくり議論をしたいところではありますが、時間の制約もありまして、一応、これまでにしました議論とか話題に出ました、特にこれから50年の今年を過ぎまして、この先何十年かは分かりませんが、どんなふうに展開していくべきか。あるいは、中部建築賞に応募する、あるいはそこで認められるということのモチベーションを、どうさらに高めていくことができるかということに触れながら、締めのご発言を先生方に、3分ぐらいでお願いできればと思います。

瀬口:水野先生の意見を聞いて、自分の締めの話ですけれども、賞をもらってそのままだとつまらないというか、市民に伝わらないですね。岡崎の景観賞というのは、私も審査委員長をさせてもらっていますけれども、市民を公募して、バスで賞をもらった建築の見学に行く。市民に見てもらおうということがあります。そうすると受賞した設計事務所の人が、来てくれている場合と来ていない場合がありますけれども、だいたい来てくれている、専門家の立場で市民の方に説明してくれる。現代の建築の良さについて、ほとんど外から、わからないことがたくさんあるわけです。見学会で説明を受けた人にはそれがわかるわけです。

ロンドンでオープンハウスロンドンというのを1992年からやられていて、もう25年ぐらいになるのですけれども、これはロンドンの重要な建築を知ってもらうために、市民を対象に建築家や行政の職員がボランティアで公開するものです。ロンドン市内の建築を、だいたい800くらい公開している。ロンドンの中で800ぐらだから、名古屋だったら20ぐらいはやってほしいと思います。

今、愛知県内の登録有形文化財については、文化の日に文化庁の補助を受けて公開をしています。だいたい40から50ぐらいですが、その中で現代建築はほとんどないのです。戦後の建築はないんです。登録有形文化財は50年以上ですから。そうすると、今、何が建築の世界で起こっているかということ、ほとんど市民の人は知らない。運動体というのであれば、やはり市民の人に分かってもらえると良い。何でこのデザインがいいのかということは専門家同士で言っているだけではだめで、市民に伝える言葉で語ってもらう。そして良い建築を体験してもらう。言葉と体験というのはやはりかなり違うので、その空間に入ってもらおう。

近代建築であれば装飾があるとかなんとかで分かるのですけれども、現代建築はほとんど装飾がなく、何がいいのかよく分からないというところが多いと思うのです。だから、そのデザインがいかにかということ、いかに都市づくりに貢献しているかということ、受賞者等を中心に5年に1回でもいいのでやっていただくと、この賞がもっと広がって、市民による評価を受けることになるのではないかと気がいたします。

五十嵐:今のお話、水野先生のお話を受ける形ですけれども、建築の展覧会の企画ともよくかわるのですが、今の美術館の人たちは、建築展は人が入ると思っているのは確かです。ただ、残念ながら、美術館の中には建築専門の学芸員はほぼゼロに近い。ごくまれにいることはありますが、基本的には美術の専門の人ですからなかなか入れない所なので、あまり建築には枠を空けてくれないのです。ただ、そういうこともあって、建築展というのは結構需要というのか、やたら人が入るというふうには、今美

術の人もたぶん思っています。

それで、建築の町歩きでいうと、シカゴでシカゴ建築ピエンナーレというのが3~4年ぐらい前に始まって、それで僕は久しぶりにシカゴを訪れました。ただ、冬に行ったのは初めてでしたけれども、冬に行くことはお薦めいたしません。本当に凍死しそうになっちゃうのですが。ただ凍死しそうな環境の中でも、シカゴには建築センターというのがあって、毎日いくつもの建築ウォーキングツアーみたいなものがちゃんと組まれている。あそこはハイライズが最初に登場した都市でもあるし、そういうのがちゃんと残っているし、毎日建築ツアーというのをやっているのに、すごく感銘を受けました。

それで今、触れられたオープンハウスロンドンみたいな企画も、日本でも例えばUIAの世界大会を東京でやる前ぐらいに、オープンアーキテクチャーというのを東京なんかでも少しやっていました。あと、僕がかかわったあいちトリエンナーレ2013のときは、ああいう芸術祭にはすごい人が来て、街なか展開と言って、美術館の中じゃなくて町の中の建物にアート作品があり、人がまわるという状況が発生していて、それと町の建築を見るのはほとんど差がないですよ。そこでトリエンナーレをきっかけに建築を見せようという仕掛けもやって、当時いくつか建物を見学して案内するプログラムを組みました。結果は全部満員だった。むしろ定員が全然追いつかない状態でした。

ただ、それはトリエンナーレのときにやっただけだったんで、潜在的な需要はすごくあるはず。それを思ったのは、大阪で3年ぐらい前からイケフェスというのをやっています。まさにオープンハウスロンドンみたいな仕組みを日本で展開しており、とてもうまく根付いているんじゃないかと思いました。この間、僕も半日だけちらっと様子を見に行っていたら、あちこちにイケフェスの参加者がいて、定員で限っているところもあるんですけど、いくつかのやつは定員なしの場所もあって、そういうところは本当にものすごい行列ができていた。近代建築メインだけれども現代建築もあって、事務所の中を見られるのもあるという、そのシステムを大阪

でやっていて、町の中にオレンジ色のガイドブックを持ったがいっぱい歩いているのを見て、ここまでそういう需要があるんだということを改めて思ったのです。きっと中部でもできるんじゃないかと思います。

あとは、賞についてもう一つだけ。新人賞みたいなものを、ぜひ考えていただけるといいかなと思います。こういう賞を後から振り返ったときに意義があるなと思っているのが、この時点でこの人を評価していたという先見の明が問われます。外れることも多いかもしれないのですけれども、でもそういう新人賞みたいなもの、それは住宅がそれに近いものかもしれないのですけれども、そういうのもあったらいいかなと思いました。

栗生:今の建築の体験ツアーみたいなものが非常に重要だと思うのは、審査もそうですけれども、書類審査、いわゆる図面だとか写真だとかを見ただけでは分からない部分が非常に多いです。

去年のことでしたけれども、第1回審査会で私しか入れなかったものが、実際に行ってみたら大変良かった。それはオーナーの話が聞けて、それから施工者、職人さんたちの話が聞けて、それから設計者の話が聞けて、周辺の地域を見て回れる。そういうことによって、建築の価値が随分高められる。ですから審査の段階で、審査員が見て回りまわすけれども、受賞された作品を見て回るツアーというのが、毎年やるのは難しいかもしれないけれども、何年に一度はあって。例えば、可能であればオーナーの話聞く。あるいは企業であれば、オーナーだけでなく、その企業に勤めている人たち。その地域でかかわっている人たちの話、そのことによって企業風土みたいなことも伝わってくるものですから、そういうことも一つの活動としてやられるといいのではないかなと思います。

それからちょうど50年前ですけれども、私が学生のときに、オーストリアの建築家のハンス・ホラインは、「すべては建築だ」というような宣言をして、大変ショックを受けたことがあるんです。ああ、そうか、何でもありか。既成の建築の枠組みを越えて、これも建築なんだよということを、きちんと説得力

のあるかたちで伝えるということがこういう審査の中で応募する側にもあって、そういう応募作が増えてくると最初は特別賞扱いかもしれないけれども、それがだんだん日本の建築文化みたいなものとして出てくるきっかけになるのではないかなと思います。そういうものを、特に若い人たちに新たなチャレンジとして期待します。ちょっと建築業界は停滞しているような感じがするので、若い人たちにチャンスを与える。そういう意味で新人賞という話も出てきたと思うんですけども、若い人たちが応募しやすい形を、もうちょっと考えていいかなと思います。

鈴木:水野先生、最後に。

水野:50年経ちますと、先ほどどなたかがおっしゃっていましたが、50年前、40年前、30年前、20年前の受賞作品を見ると、だいぶ時代の流れを感じますね。

ということは、たぶんこの50年間でも、戦後の現代建築はいろいろ様変わりしてきたな、自分自身も価値観が随分変わってきたなと感じるわけです。そういう意味でいうと、従来作品に対しての保存運動みたいなものを起こす一つの契機、それは残したほうがいいんじゃないかと思うような作品が壊されそうだというときに、保存運動を起こす一つのポイントにしていきたいなと思います。

本当に価値があるのかどうかを今判断するのは難しいと思いますし、またそれを保存するに際しては、単に保存というのはほとんど不可能なので、再生修復をして再利用していくというリノベーションというのが必ずくっついてくるんですけども、そのリノベーションの知恵みたいなものを、どうやって越えていくかというのが今の時代の大事なことです。

ですから過去のいいものと今の時代の知恵と、どう合わさっていったら、どんなことができるかという、これも一つの大事な挑戦でございます。

そういう受賞物件に対して、やはり我々は少し敬意を払いながら見守っていくということ、これが一つ大事じゃないかなというふうに思っております。ありがとうございました。

鈴木:ありがとうございました。

まだまだ議論を伝えたいところでございますが、

今日はいくつか大きな中部建築賞の動きでいろいろお話ができたところです。もう、ほぼ予定時間になっておりますが、延長がほんの少し許されているようですから、会場のほうから何か質疑がございましたら手を挙げて。よろしいでしょうか。

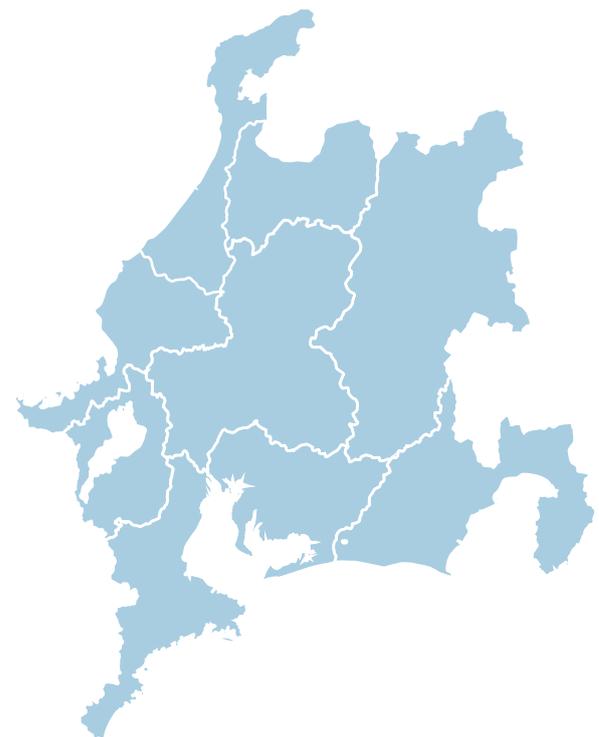
それでは、行き届かない司会進行でございましたが、先生方本当に心に触れるご指摘、それからそれぞれが、少しずつ違いながらでも目指す方向は、かなりありがたいお話をいただいたと思います。これをもちまして、本日の50周年記念シンポジウムをお開きとさせていただきます。

なお、今日は非常に時間が短くてお話ができなかった部分は、これから今回50回目の表彰式がございまして、その後で記念パーティみたいなもの、ご都合のつく先生には残っていただきますので、またそういうときにでもお話できたらと思います。

今日は本当にありがとうございました。

司会:ありがとうございました。それではご登壇いただいた皆さまにもう一度拍手をお送りくださいませ、ありがとうございました。

以上をもちましてシンポジウムは終了とさせていただきます。



パネラー紹介 (敬称略)

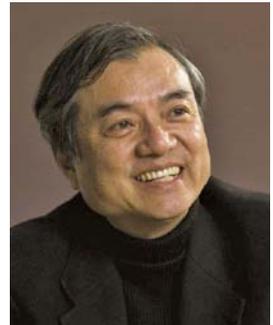
五十嵐 太郎

1967年生まれ
1992年 東京大学大学院修士課程修了 博士(工学)
現在 東北大学大学院教授 建築史・建築批評家
あいちトリエンナーレ2013芸術監督
第11回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館コミッショナー
「窓学展 一窓から見える世界」の監修を務める
第64回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞
著書 『ル・コルビュジエがめざしたもの―近代建築の理論と展開―』
(青土社)
『モダニズム崩壊後の建築―1968年以降の転回と思想―』
(青土社) ほか多数



栗生 明

1947年生まれ
1973年 早稲田大学大学院修士課程修了 (株)横総合計画事務所入社
1979年 (株)Kアトリエ設立 87年(株)栗生総合計画事務所と改称
1992年 千葉大学工学部建築学科助教授就任
1996年 同大学教授就任、(株)栗生総合計画事務所主宰
現在 (株)栗生総合計画事務所代表取締役 千葉大学名誉教授
中部建築賞審査員長
代表作品 カーニバルショーケース、植村直己冒険館、岡崎市美術博物館
平等院宝物館・鳳翔館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
伊勢神宮・式年遷宮記念せんぐう館等多数



瀬口 哲夫

1945年生まれ
1969年 名古屋大学工学部建築学科 卒業
1975年 東京大学工学系大学院博士課程修了(池辺 陽研究室) 工学博士
豊橋技術科学大学工学部助教授
名古屋市立大学芸術工学部教授
現在 名古屋市立大学名誉教授 (公財)明治村理事
名古屋市、岡崎市など歴史的風致維持向上協議会会長など
著書 日本近代建築家列伝(共著)
名古屋をつくった建築家 鈴木禎次(単著) ほか
受賞 日本建築学会賞(業績、論文)、日本都市計画学会功績賞等



水野 一郎

1941年生まれ
1964年 東京大学工学部建築学科 卒業
1966年 東京芸術大学大学院建築学専攻修了
(株)大谷研究室入社
1976年 金沢工業大学着任
現在 金沢工業大学教授、建築家
代表作品 鳥越村営 宮の森住宅団地、金沢市民芸術村、獅子ワールド館、
手作り木工館「もく遊りん」など
著書 伝統工芸とまちづくり



鈴木 利明

1949年生まれ
1974年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
1974年 (株)日本設計事務所(現 日本設計) 入社
主な業績 名古屋三井ビル本館、鳥見パークシティ、
浜松市立高校、豊橋市新庁舎、海陽中等教育学校
ほか
2014年 一級建築士事務所 デザイン スズキ設立
現在 一級建築士事務所 デザイン スズキ代表
中部建築賞審査員



50周年記念事業にご協力いただいた皆様

皆様のご支援のおかげで、中部建築賞50周年記念事業を無事終了することができました。
ご協力賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

中部建築賞協議会
50周年記念事業実行委員会

一般部門

(3 〇)

名 称	所 在 地
鹿島建設株式会社 中部支店	名古屋市中区
清水建設株式会社 名古屋支店	名古屋市中区
大成建設 株式会社 名古屋支店	名古屋市中村区
株式会社 竹中工務店 名古屋支店	名古屋市中区
戸田建設 株式会社	東京都中央区
日本建設 株式会社名古屋支店	名古屋市中村区
矢作建設工業 株式会社	名古屋市中区

(2 〇)

名 称	所 在 地
株式会社 石本建築事務所	名古屋市中区
株式会社 東畑建築事務所名古屋オフィス	名古屋市中村区

(1 〇)

名 称	所 在 地
株式会社 アール・アイ・エー名古屋支社	名古屋市中村区
株式会社 AUUA建築研究所	名古屋市中区
青木興業 株式会社	伊豆市
株式会社 青島設計	名古屋市中区
株式会社 新居千秋都市建築設計	東京都目黒区
株式会社 アルス建築事務所	福井市
株式会社 安藤・間	名古屋市中区
石川建設 株式会社	磐田市
株式会社 伊藤建築設計事務所	名古屋市中区
株式会社 伊藤工務店	名古屋市中川区
有限会社 伊藤工務店	松阪市
岩部建設 株式会社	愛知県武豊町
株式会社 ウエキグミ	福井市
株式会社 浦野設計	名古屋市中区
株式会社 浦辺設計	大阪市中央区
株式会社 大林組 本社 設計本部	東京都港区
株式会社 おおみ設計	砺波市
株式会社 織田設計	金沢市
金澤工業 株式会社	長野市
神谷建設 株式会社	豊明市
環境プランニング	飯田市
岐建工業 株式会社	福井市
株式会社 北川原温建築都市研究所	東京都渋谷区
株式会社 共同建築設計事務所	東京都新宿区
株式会社 キョエイビルド	越前市
株式会社 熊谷組名古屋支店	名古屋市中区
株式会社 熊谷組 北陸支店	金沢市
株式会社 久米設計 名古屋支店	名古屋市中村区
株式会社 車戸建築事務所	大垣市
株式会社 黒川建築事務所	名古屋市中区
株式会社 現代建築研究所	東京都新宿区
兼六建設 株式会社	金沢市

名 称	所 在 地
有限会社 香山壽夫建築研究所	東京都文京区
株式会社 佐藤総合計画	東京都墨田区
佐藤工業 株式会社 北陸支店	富山市
合資会社 三共建築設計事務所	名古屋市中区
株式会社 サンワコン	福井市
株式会社 塩浜工業	敦賀市
清水建設 株式会社	東京都中央区
清水建設 株式会社 北陸支店	金沢市
城東建設 株式会社	金沢市
鈴与建設 株式会社	静岡市清水区
須山建設 株式会社	浜松市中区
株式会社 大建設	名古屋市中区
大建設 株式会社	岐阜市
大和建設 株式会社	越前市
株式会社 高木滋生建築設計事務所	静岡市葵区
株式会社 田中建築事務所	東京都港区
株式会社 田中忠雄建築設計事務所	静岡市葵区
株式会社 丹靑社	東京都港区
中日設計 株式会社	名古屋市中区
辻建設 株式会社	富山市
T SUCHIYA 株式会社	大垣市
株式会社 釣谷建築事務所	金沢市
株式会社 東京建築研究所	東京都新宿区
株式会社 徳岡設計	大阪市北区
徳倉建設 株式会社	名古屋市中区
砺波工業 株式会社	砺波市
中村建設 株式会社	浜松市中区
株式会社 中村勉総合計画事務所	東京都文京区
有限会社 ナス力	東京都新宿区
株式会社 日建設	名古屋市中区
株式会社 日本設計	名古屋市中区
株式会社 丹羽英二建築事務所	名古屋市中区
株式会社 野口建築事務所	名古屋市中村区
白竹建設 株式会社	碧南市
株式会社 原広司・アトリエ・ファイ建築研究所	東京都渋谷区
企業組合 針谷建築事務所	静岡市駿河区
福島加津也+富永祥子建築設計事務所	東京都世田谷区
堀田建設 株式会社	亀山市
前田建設工業 株式会社 中部支店	名古屋市中区
株式会社 前田産業	福井県若狭町
松井建設 株式会社 名古屋支店	名古屋市中区
松本土建 株式会社	松本市
丸中建設 株式会社	豊橋市
三河建設工業 株式会社	新城市
株式会社 三菱地所設計	東京都千代田区
株式会社 宮本忠長建築設計事務所	長野市
株式会社 三四五建築研究所	富山市

名 称	所 在 地
株式会社 森下建築総研	大阪市中央区
株式会社 安井建築設計事務所	名古屋市東区
株式会社 山口工務店	伊勢市
株式会社 山下設計 中部支社	名古屋市中区
株式会社 横河建築設計事務所	東京都品川区
株式会社 レーモンド設計事務所	東京都渋谷区
株式会社 ワーク・キューブ	名古屋市昭和区
株式会社 渡邊工務店	愛知県飛島村

住宅部門

(3 0)

名 称	所 在 地
誠和建設 株式会社	名古屋市北区
株式会社 中村工業	一宮市
株式会社 新津組	長野県小海町

(2 0)

名 称	所 在 地
創SHINKO 株式会社 シンコー建創	岡崎市

(1 0)

名 称	所 在 地
有限会社 アイシーユークー級建築士事務所	東京都中央区
株式会社 アトリエ9建築研究所	東京都目黒区
株式会社 荒川工務店	豊橋市
株式会社 榎本弘之建築研究所	東京都渋谷区
有限会社エムズ建築設計事務所	吹田市
川辺建設 株式会社	名古屋市北区
倉橋友行建築設計室	岡崎市
光崎敏正建築創作所 有限会社	名古屋市千種区
榊原建設 株式会社	一宮市
サンエー建工 株式会社	砺波市
株式会社 杉浦組	浜松市中区
杉山一三建築デザイン研究所	稲沢市
株式会社 鈴木建設	掛川市
株式会社 相宮工務店	岐阜市
第一建設 株式会社	長野県軽井沢町
大同工業 株式会社	伊東市
有限会社 タイプ・エービー	名古屋市中村区
竹山明英建築建築研究所	名古屋市中区
館林建設 株式会社	土岐市
株式会社 土屋R&C	大垣市
株式会社 トミソー	富山市
株式会社 ナカシロ	名古屋市守山区
株式会社 長瀬組	名古屋市西区
西和人一級建築士事務所	能美市
F A S工房・原宏	市原市
株式会社 ほるくす	豊田市
株式会社 マウントフジ アーキテツ スタジオ	東京都港区
株式会社 前田工務店	名古屋市昭和区
株式会社 マブチ工業	浜松市北区
みつほ工業 株式会社	金沢市
村中建設 株式会社	福井市
有限会社 裕建築計画	名古屋市千種区
株式会社 ヨシコウ	中津川市
米井建設 株式会社	富山県上市町
LIC・山本建築設計事務所	岐阜市
渡辺隆建築設計事務所	磐田市
渡辺建設 株式会社	裾野市